



苦闘する大都市

『ロサンゼルス・タイムス』の 報道から

八 木 三 男

一、アシュレーとケヴィン

十歳の姉アシュレーと八歳の弟ケヴィンは性格が対照的だ。ケヴィンは攻撃的でいつもトラブルを起こす。

アシュレーはゆったりしていて、行儀がよくもの静かだ。自分で金切り声をあげたいときでも調停役に回る。父親カルヴィンは強度の麻薬とアルコール中毒。母親は数年前家族を棄てて家を出た。子どもたちはロングビーチ（ロサンゼルス南西部）のウェストサイドのアパート（一LDK）に、父親とそのガールフレンド、リタ・グリーンと住んでいる。リタも麻薬をやる。時々友だちの麻薬常用者たちが泊まっていく。リタは四歳になる息子を昨年里子に出したが、彼女の弁によると、麻薬問題が原因ではないという。

アシュレーの家があるロングビーチのウェストサイドは工場地帯に隣接した多民族混住地域で、小さなアパートが建ち並び、少なくとも住民の四分の一が麻薬常用者かアルコール中毒である。

アシュレーのアパートはトイレの水漏れのため、床に水が溜まって悪臭を放っている。バスタブの縁にかけられた布にはシラミが湧いている。ケヴィンもアシュレーももう何週間も風呂に入っていない。麻薬の費用のために売り払われた冷蔵庫やガスレンジであいた台所のスペースには友だちの麻薬常用者が寝ている。アシュレーもケヴィンもこの四ヶ月学校へいって

ない。父親がロングビーチから引越したいと思って学校をやめさせた。アシュレーは近くの小学校へ行ってグラウンドに飛び出してくる子どもたちを見つめることがある。「わたしほんと勉強したいの」本来なら五年生である。「 3×3 ?、分かんない」。学校へいつている生徒ならもう何桁かの割り算だってできるはずだ。「わたしもそういうふうになりたい。すっかり遅れちゃった」

あるとき、父親の友だちがグラウンドを見つめているケヴィンに質問した。「 $2 + 2$ は?」「わからない」。こんどは両手で一本づつ指を出した「 $1 + 1$ は?」。ケヴィンが頭を掻きむしるようにして怒鳴った。「ヒヤク!」

ケヴィンは乱暴で怒りっぱい。幼稚園のころ鉛筆で女の子の目を突つたことがある。先生の足を二度も蹴った。父親は息子に向かって「お前は刑務所行きだな」とか「やせのガナガナ」「うすのろ」という。ケヴィンはケヴィンで「おもちゃも買ってくれないくせに、いつも殴ってばかりいて」「父ちゃんのようになりたくない」「嫌いだ」「だけどドラッグやらなきやいい父ちゃんなんだ」

姉のアシュレーがいつも汚れた服を着ているので、服を探そうとケヴィンは大きな鉄製のごみ箱に入ってごみ袋をひっくり返してみた。服はなかったが、代わりにズックのテニスシューズを探し当て、アシュレーにプレゼントした。残念ながら小さすぎた。アシュレーがくやしがつた。

カルヴィンの二番目の妻が麻薬を彼にとりもった。妻は減量のために使っていたのだが、彼もモーニングコーヒーに少量づつ入れるようになった。次第に量が増え、麻薬代が週に八百ドルにもなった。十八年も一生懸命働いて店まで持った溶接の仕事も、家もボートも全部麻薬になった。そんな時妻が家を出た。彼は麻薬に溺れ、精神不安定をケヴィンを痛めつけることで紛らわせた。

一方、アシュレーは父親をクレージーだといい、自分たちが何もしないのに狂ったようになるといっているが、自分の悲惨な境遇を生き抜くためには、父親のガールフレンド、リタを頼りにしたいと思っている。リタの金きり声も彼女にはあたかも音楽だ。「わたしリタが好きよ。いいかあちゃんだわ。夕飯だってみんな作ってくれるもの」。彼女は実母が決して戻らない

ことを知っている。

父親とリタとの間は麻薬と金の問題で諍いが絶えない。しかし、アシュレーはいつもリタの味方だ。「もし父ちゃんが麻薬を止めないようなら、わたしを連れて逃げてよ」。リタはリタで、父親より自分を選んでくれていることをうれしく思っている。そして、ふと里子に出した自分の息子を取り戻したいと思うのだ。

いま、カルヴィンとリタは半年分の家賃の取りたてに直面し、ロングビーチから、一四〇マイル離れたバーカーズフィールドへ引っ越そうとしている。カルヴィンとリタもこの辺で麻薬から訣別して、新しい環境のもとで生きたいと思っている。しかし、アシュレーは「父ちゃんは麻薬やめるといったけど、わたしは父ちゃんが信じられない」といった。

二、タミカ

三歳のタミカもアシュレーと同じロングビーチのウエストサイドに三十四歳の母親テオドラと住んでいる。太平洋岸ハイウエーに近いこの辺りは、娼婦が群れをなして徘徊し、二、三歳の幼児たちが街をひとり歩きまわり、時に食べ物のためのお金をスパーのまえ

で物乞いするといった光景が見られる。

テオドラはHIVの陽性であり、コカインやヘロインの常用者である。いまは市の福祉とフードスタンプでやっと生活している。彼女はタミカを愛していると主張する。実際に、道を渡るときは必ずタミカの手を引くし、病気のときは緊急病室にすぐ連れていく。新しいボーイフレンドと寝るときは、タミカがいたずらされないように必死で守る。「だけど、ヤク使っているときとか、探しているときとか、タミカのことなんかほったらかしね」。涙を浮かべていう。「自分自身が大嫌い。これ病気なのよ」。

タミカは肉体的な虐待こそ受けないものの、精神的にはいつも飢餓状態である。テオドラがボーイフレンド、ジョニーと寝るときなど、しばしばアパートにひとりである。テオドラとジョニーがちよっとした仕事で稼いだ金で麻薬を買いにでかけた時など、涙も見せずに、アパートの玄関先でじっと坐って母親の帰りを待っていたりする。「パパは刑務所にいるの。だから、ママは悲しいの」

このようにして、タミカが母親に放置された場所は、今年だけでも九カ所にものぼる。まえのボーイフレン

ドの母親の家、ガレージ、ホテル、常々ピストルで自殺したいといっている麻薬仲間のアパート等さまざまである。

ある日曜日の夕方、タミカはまる一日食べ物を口にしていなかった。テオドラは繰り返し食べ物ねだるタミカにイライラしていた。空っぽのポケットを探りながら呟いた。「わたしだってヤクが欲しいわよ。」とうとうテオドラが怒鳴った。「タミカ！お黙り。お願いだから纏わりつかないでよ」「外で遊びなさい！」

三、麻薬と子どもたち

一九九七年十一月十六日（日）と十七日（月）両日に『ロサンゼルス・タイムス』は「麻薬常用者の孤児たち」と題する都市問題担当記者ソニア・ナザリオの計九ページにおよぶ長大なルポルタージュを掲載した。一日目のそれはこの夏五ヶ月間にわたって麻薬常用者の数家族にかかわる子どもたちを密着取材したものである。二日目は、一日目の半分の長さだが、麻薬常用者の母親がいかにして再び母親らしくなり、家族を取り戻すか、そのたたかいのルポである。

前記の具体的な子どもについての記述はルポそのま

まではなく、できるだけその文章を損なわないように取捨選択し、ふたつの事例を限って筆者がまとめたものである。また、この小文の内容は一日目のルポに限られる。

合衆国連邦調査によると、アメリカの少なくとも五人に一人の子どもは、親のどちらかがアルコール中毒が麻薬の常用者である。ロサンゼルス郡（ロサンゼルス市とその周辺地域、いわゆるロサンゼルス）の場合福祉ケースの子どもの八〇%から九〇%が親による虐待に巻き込まれており、それは他の大都市圏のどこよりも高率である。また、少なくとも四人に一人の子どもの親が麻薬常用者だといわれる。

子どもたちは大人社会の虐待や裏切りといった恐怖と記憶のなかで毎日を送っている。母親が麻薬でうろつきまわっている間数日も置きざりにされ、飢え死にすることすらある。麻薬とアルコール中毒の親や保護者による虐待で毎年二千人からの子どもが死んでいる。

そのために、法律は教師、警察官や医師等の専門家の活動を要請しているが、多くの人々はそれらを必ずしも信用しておらず、不幸な子ども達の大部分はリーダーからもれ、行政は発見できない。

ドラッグはしばしば小頭児を産み、先天的に子どもが震えが止まらないという禁断症状を呈する場合がある。

一般に子どもはいつも怖がっており、捨てられ、放置されたと思っている。また愛されていない、助けてもらえないと考えている。しかも、子どもたちはそれが自分のせいだと自分を責めさえる。「考えてもみなさい、もし母ちゃんや父ちゃんがおまえを愛さなかったら、誰がおまえなんか愛してくれるのよ」。こうして子どもたちは近しい大人によって性的・肉体的に虐待を受け、常に心に深い傷を負いながら、長期間血縁のしがらみのなかで呻吟し続ける。

四、その翌日、行政と子ども

翌十七日（月）の『ロサンゼルス・タイムス』は、ロサンゼルス郡の児童福祉当局が四人のケース・ワーカーを派遣し、新聞報道があった十六日の午後、ロングビーチで前記のタミカを探し出し、一時的に母親から引き離して新しい保護施設に移したと報じた。行政が迅速に対応した。

児童福祉当局は三日以内にタミカを施設に移した正

当性について裁判にかけなければならないが、一方、母親は子どもを引きとるか施設にそのまま預けるか決め、裁判所に上申することができる。

しかし、翌々日二十日（木）の同紙によると、日曜日にタミカが保護されたガレージで、母親テオドラが児童虐待の罪で逮捕されたことを明らかにした。ガレージには注射器が散乱し、ヘロインと思われる茶色の液が入った注射器がタミカのすぐ手の届くところにあった。彼らはすんでのところまでホームレスになるところだった。

水曜日の当局の発表によると、テオドラは児童を危険に曝した廉により収監三十日と同時に丸一年間親の再教育施設に送られることになり、さらに料料六六七ドルが課せられた。裁判所はタミカが母親と同じHIVの陽性かどうか直ちにメディカルテストを行うよう命じた。

一方、ロングビーチのエイズ専門のある小児科医は、テオドラ自身でタミカの生後一歳半までは定期的にHIVテストを受けさせていたと証言した。さらにその医師は匿名を前提に次のように語った。HIVテストでは異状はなかったが、タミカが一歳のとき目の隈が

ひどく、あるいは置き去りにされたり、麻薬による虐待のサインではないかと思ひ、子どもを母親から引き離すべきだとロサンゼルス郡児童・家庭局に報告したが、児童福祉職員がきて大まかなチェックをしただけで終わった。「一、二度来たでしょうか。ただそれだけです」。

これに対して、児童・家庭局のスポークスマンは次のようにいう。われわれが扱う子ども虐待や置き去り件数は一九九〇年の十万件から昨年は優に二十万件を超えている。「児童虐待の申し立ては増える一方で、タミカの場合でも、見つけるのは難しいのです」。実際に児童福祉予算は少なすぎるし、職員の過度の労働量が多くの子どもの不幸から救えないでいるのも確かなのである。しかし、「子どもの問題はこの社会のなかで最優先されるべきだ。子どもは選挙権をもっていない」タミカ事件にかかわる裁判官や弁護士士の弁である。

ちなみに、ロサンゼルス郡当局はアシユレーとケヴィンについても、十七日中にも採し出し、同様の処置をするだろうと語った。

十八日の邦字『羅府新報』は、『ロサンゼルス・タ

イムス』が報道した十七日、郡児童福祉局に報告された児童虐待の件数が通常の日より二〇％多かった、と報じ、次のような解説を載せた。

ロサンゼルスでは、家庭で虐待を受けている子どもは、学校のクラス内でその症状を見せることから、この夏以来特定の学校に精神医学専門のソーシアル・ワーカーを派遣し、教師が子どもに対する保護の必要性を判断するのに協力している。家庭環境の問題を感情や態度として表現している子どもは多いが、それに教師が気づいても子どもの家庭調査に踏み切ることがむづかしいからである。

〈追記〉『ロサンゼルス・タイムス』は翌九八年一月十一日に再度この問題をとりあげた。子ども虐待の通報があまりに多く、緊急ホットラインが麻痺しており、郡の児童福祉局は機能していないと報じた。たとえばタミカの場合、前記の医師の他に地域の保健婦等少くとも三人が母親による虐待を当局に通報したが、新聞が報道するまで何も起こらなかった。この十年間に通報件数は二倍になったのに、処理件数は全く変化がないというのである。

(やぎみつお 新潟県民教育研究所所長)